

京都大学大学院教育学研究科
教育実践コラボレーション・センター E.FORUM

「命と向き合う教室」

～子どもが「命」に見える学校・学級づくり～

2016.2.20. in 京都大学

東松島市立鳴瀬未来中学校 制野俊弘

《今日お話ししたいこと》

思春期の壁を乗り越えるためには…

①「命の危機」の共有体験が

子どもの心を開くことにつながる。

②「命とは何か」の「問い」は

社会や世界を問うことにつながる。



「命とは何か」という問いは

社会全体として問うべき課題である。

【事例1】

震災後、不登校状態になったB子のケース

母親は震災以降、「闇の部分を持つようになった」と感じており、以前と変わってしまったと思っている。

(略)夜に言い訳をして約束した時間よりも2～3時間遅れて夜中に帰ってくることも時々あり、このような時は帰ってくるまで寝ることもできず不安な気持ちでいる。仮設の両隣は空き家になっているので、母親が帰ってくるまではテレビをつけて過ごし、母親が帰ってきたことが確認できると眠れる。(略)二人だけの家族なので、母親がいないとどこに行くこ

ともできない。母親が出かける時はいつでもついていく感じ。(自分の)父親については何も聞かされていない。(略)小さい頃から祖父母に育てられた。(略)自分にはとても優しく、祖父はお年玉に5万円をくれたり、祖母は母親代わりのことをいろいろしてくれた。(略)休みの日は母親はほとんど寝ていることが多い、起きたときには料理をするが、起きてこない時にはお菓子などをつまんで食事代わりにする。

※家には大量のお菓子を買っているという。

【事例2】

震災で母親を亡くしたC子のケース

3時間目英語，体調不良を訴えて来室。36.5度。目がうるんでいたもので，ベッドの方に連れて行くと，声をあげて泣き出した。「何かあった？」の問いかけには，首を振る。「我慢しないでいいから，泣いたらいいよ」というと，しばらく大泣きした。背中をさすりながら寄り添う。20分程度泣いた後，いくらかすっきりしたようで，いつもと同じ感じで話せるようになった。母親は震災で亡くなった。一人っ子。父子家庭。母方祖父は幼稚園のころ病気で他界。祖母はその2～3年後躁鬱病で自殺。祖母はとてもかわいがってくれたようだ。母の妹は昨年ガンで他界。（身近に親戚がいるが）あまり付き合いがなく相談相手になる人が身近にいない。

父親は一生懸命してくれるが、父親では補えない部分がある。下着や生理用品などは祖母に買ってもらう。弁当の日は、自分で作ったり、父親が作ってくれたり。毎日18時ぐらいには帰ってきて、夕飯を作ってくれるが、時々遅くなる連絡が入った時は、一人でお菓子などを食べて過ごす。料理をするのは嫌いではないようなので、みそ汁ぐらい作ってみることを勧めると、みそ汁はインスタントで済ませているという。クラスの女子には自分の事情について知らせるがあるが、何かの拍子に母親の話題になった時は、適当にやり過ごすようにしている。(略)いつもがんばったり、明るくしていなくてもいいので、つらい時は無理しないでいつでも来ていいことを伝える。(略)

※後日、保健室にて「母親は自分のせいで亡くなった」と涙をこぼしながら語った。

【事例3】

震災で母親を亡くしたE子のケース

(3月11日の前日)明日が来るのが嫌だから、夜はスマホをぼーっといじりながら現実逃避する。母親は妹の幼稚園の前の職場で仕事をしていた、すぐに逃げれば助かったが、幼稚園に迎えに行き、渋滞に巻き込まれて亡くなった。(略)父親が(離婚して)出て行かなければ母親が仕事をする必要もなく、死なずに済んだのにとすると、父親のことを殺してやりたいと思うこともあった。(略)自分のことを話したことがないので、みんなが自分のことをどれだけ知っているのか分からない。例えば、自分のいないところで、担任が自分の説明をきちんとしてくれたら、自分で複雑な説明をしなくても済むのと思う。(略)

震災直後、全く感情がなくなった時期があって、祖母からおかしくなった時期があると聞かされたが、その時のことは全く覚えていない。(亡くなった)母親と対面して一度大泣きしたあと、その後は涙が全く出なかったことは覚えている。

妹(小4)と接する時はやさしくしてあげたいと思う。自分よりも母親と過ごした時期が短いから。(略)この学校にどれだけ自分と同じ境遇の人がいるかわからなかった。昨日、ツイッターでF子のツイートを見て、境遇の似ている人を初めて知った。卒業前に話ができればよかったのと思った。ツイッターに自分の思いを載せるわけではないが、自分の知らない人たちがコメントしてくれるのでラインより楽。最近、夜なかなか寝つけない。夢を見るが覚えていない。(略)似た境遇の人を挙げて話をしたことで、いくらか安心ではないが自分だけではないと感じてくれたようで、涙を浮かべながら話してくれた。人前で泣きたくない、心配かけたくない、という思いから過剰にがんばっていることが分かった。

明るくがんばっていることは、小学校の先生も中学校の先生も祖母も気づいていることで、それを密かにみんなが心配していることを話す。C子が保健室で号泣したことや、(妹を亡くした)G男が荒れていたことなどを話し、震災に蓋をしては生きてはいけないのだから、自分の気持ちに素直になってつらい時はいつでも相手になることを話す。

【「命とは何か」をどう位置づけるか】

- ①「こころ」と「からだ」の問題(これに「生活」の危機を加えて私は「命の危機」と捉えている)は間違いなく現在の教育の中心的課題である。
- ②震災に関わらず「命の危機」は既に危機的状况, 末期的症状を迎えている。



今報告はこのような状況を打開する一つの試みとして、「命とは何か」という問いを中心に、子どもたちの私的な問題(経験)を授業という公的な場で共有し合うことで、「関係性の再構築」しようと試みたものである。

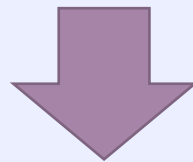
「3. 11」の震災体験を通して

○制野「文化の学習の基底に命の学習を」(2011.4)

その後、運動会、生きている証を探す授業、フットボールの歴史再創造型実践、みかぐら、集団マツの実践などでも何か「届かない感」があった。

○中森「学校は本当に子どもの命を守ってきただろうか」

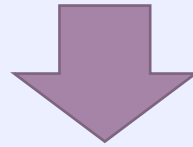
「大川小の事例が特殊な事例ではない」(2014.3)



《『命』とは何か》を問う(問い続ける)授業へ

〔第1時〕「私の震災体験」を綴る

○「綴る自由」と「綴らない自由」の狭間で葛藤・逡巡する。



※はじめは「保健」の授業として構想したが、
「保健」という領域では抱えきれない課題、
「こころ」と「からだ」と「生活」の危機＝「命の
危機」が綴られてきた。「総合学習」へ転換。

〔第2時〕Y, Aらの作文を読み, 綴る。

《津波で両親を失い弟と二人きりになってしまったAの作文》

震災の日, 私は女川第二小学校で授業を受けていました。

(略) 私達は祖父と祖母に連れられて別の避難所へ移りました。1週間くらい避難所にいたら, 野蒜の祖父と祖母がきてくれました。そこから私達は野蒜地区で生活することになりました。4日後くらいに女川へ戻りました。祖母が, 「ちょっと待ってて」というので私達は待っていました。祖母は泣きながら戻ってきました。祖母は, 「ママね, 死んでた」と言われ, 私達は言葉も出てこないし, 泣けもしませんでした。まだ, その事実を受け入れられませんでした。お父さんは, 今も遺体が見つかっていません。葬儀はしてしまいましたが, 私は見つからない限りお父さんは今どこかで生きていてほしいなと思っています。(略)

《母と姉を目前で亡くしたYの作文》

僕は震災前も震災後もずっと命のことを考えていました。命について書けることを少しだけうれしく思います。(略)居間の大きい窓が割れ、一気に水が入ってきました。水がまだまだ流れてくる中、お父さんと弟がいないことに気づきました。でもそんなこと考えてる暇はない。お母さんが水で浮いたタンズにじゃまされていて、それをお姉ちゃんが助けていました。僕はそれをただ見ているだけでした。(略)僕は命については、先生が言うとおりの答えなんてないと思います。よく聞く言葉だけど「失って初めて気づくもの」でもあるし、「強くて、弱くて、美しいもの」とも思うし、そのまま「生命を表すもの」だとも思います。でも僕は答えを出せていません。出せるわけがありません。でもそれでいいと思っています。僕たちはまだまだ「命」と付き合っていきます。

〔第3時〕YやAの作文に対するみんな の考えを読み，綴る

○クラスごとに別々の作文を読む。多くの共感や励まし，意見が綴られる。



「関係性」の構築の端緒は「命の危機」
の共有体験を語るところから始まる。

《両親を亡くしたAの作文》

私は、今日I君の作文を聞いて私もお父さんとお母さんが亡くなった時に、「何であの時あんな声のかけ方をしたんだろう」「もっと一緒にいれたんじゃないかな」とかたくさん事を考えました。そして、お父さんとお母さんが亡くなった時は、光が届かないほど深い暗闇に閉じ込められた気分でした。「もう何もしたくない」「生きたくない」「誰もいない」など、多くの事をずっと思っていました。今でもたまにあります。このような事を思う時は決まったように、(夢の中で)お父さんとお母さんが笑って自分のことを見えています。私はそのお父さんとお母さんの方に手を伸ばそうとします。しかし、全然届きません。でも届くことはないと実感しているのに手を伸ばし続ける自分が嫌です。だから、心のどこかで誰かに助けを求めていると思います。そう思うとまた嫌になります。私はこんな悪循環をあの日から繰り返しています。

《幼い頃に親が離婚し居場所がないことを 訴えるRの作文》

「自分から生きるのをやめたりする人の気持ちが分かりません」たしかに、自分の思いこみかもしれないけど、本当に考えて、悩んで、それで出した結果が「死」なのです。自死する人だってずっと生きていたいのです。けどある事が原因で自分を見失うと、死んでこの世から消え去りたいと思ってしまうのです。私も自死したいって思う時がたくさんあります。家にもどこにも気持ちの居場所がないから。いろんな人に「居場所は自分で作るもの」とよく言われます。たしかにそうかもしれませんが。

でも、いくら友達が多くても、話せる人がいても「親」に見捨てられてしまっっては、もう自分の生きる意味も見つけれません。どうして生まれてきたんだろう、生きてても意味がないんじゃないか、もう消えてしまいたい、そう思うのです。私は毎日考えて、でも、答えがでなくて、とても苦しいのです。泣いて、泣いて、自分を見捨てた親を憎んで、恨んで。でも、答えはない。でも、これは自分の人生。永遠に死ぬまでついてくるのです。これからもずっと。いくら、親を憎んでも、意味はないけど、それでも憎んでしまうのです。(略)

〔第4時〕AとRの作文を読み、「命」について考える

Aの変化 →これまで押し込めてきた思いをみんなの前で吐露する。

Rの「叫び」→親の離婚による「居場所」「存在理由」の喪失に「自死」を考える。

※共通点は「生きづらさ」による「命の危機」

※Rに対して「親のために生きているのですか？」という問いが出される。

〔第5時〕YとKの作文を読み「命の価値」 について考える(討論)

Y＝「命はどんな人でも平等」

→観念的・理想的＝建て前？

K＝「やっぱり自分の命が一番」

→現実的・实际的＝本音？

※「中間派」も含めて意見はほぼ三つともえ。代表的な意見としては、「命はその人の生き方によって価値が変わる」「いざとなれば誰でも自分の命を守るもの」「命とは生きること」

〔第6・7時〕「私の見つめた『命』」を綴り、読む

《両親を亡くし弟と二人きりになったAの作文》

私は最初、この震災についての作文を書きたくなかったし、読みたくもありませんでした。だって、あまり自分の事を知られたくないし、嫌な事を思い出して書いたって自分には何の得もないからです。(略)しかし、私はみんなの前で読みました。(略)この時、授業中何度も涙がこぼれそうになりました。その度に私は下を向き、必死に涙がこぼれるのを我慢しました。(略)だけど、みんなが自分の作文を聞いて思ったことや感じたことを率直に書いてくれました。なぜかすごく嬉しかったです。自分のことをあまり知られたくないと思っていた自分がこの時に少し変わった気がしました。(略)私はこの授業を通して自分を見つめ直すことができました。そして、自分の知らない本当の自分を知りました。それは本当はさみしいって思っていたり、嫌な事ばかり考えている自分です。

《親の離婚で居場所を喪失していたR》

私が前、作文を読んだ時、Sから「Rは親のために生きているのか」と言われました。それから自分は何のために生きているのだろうと考えることが何度もありました。(略)でも今は一番自分がやりたいこと、大切なこと、もの、人、夢があるから、自分はがんばって生きていられるんだと思いました。だって生きてないと、命がないとできないことだから。(略)だけどやっぱり学校とか家にいて邪魔かなとか思うことがあって、今でもすごい気持ち 불안定になります。それを乗り越えるのが今の私の目標で頑張って生きていきたいです。

《一度書いた文を破棄し書き直したNの作文》

※前段で【人の幸せ】について綴るが、「幸せって人それぞれの感じ方の問題なの？」という問いかけにしばらく考えた末に次のように綴ってきた。

やはりよく分からない。どれだけ考えても分からない。震災に限らず苦しさを味わった人を助けられないのがくやしい。同じ苦しさを知れないのがつらい。きれいごとばかり書いても意味がない。いくら話をきいても、その人の助けにはならない気がする。どれだけ自分がかんばろうと結局、他人事になってしまう。その人自身にはなれないからほんとうのつらさが分かってあげられない。

最後に

～「答えの教育」から「問い続ける教育へ」～

- 「命の危機」の共有体験が子どもの心を開く
→私的な「問い」から集団の「問い」へ
- 「命とは何か」の「問い」は社会や世界を問う
→「命とは何か」を考えることは、「子どもの発達を阻害するものは何か」の問いにつながる



「命とは何か」を問い続けることそのものが、思春期の壁を乗り越える大きな契機となっている。



未来の担い手たちの声に耳を傾けましょう！ご
静聴ありがとうございました。